前田野目窯跡発掘調査概要

五所川原市教育委員会

1968年5月

Ⅰ はしがき

１９６７年春より夏にかけて，青森県五所川原市大字前田野目字鞠ノ沢２８及び字砂田で発見された須恵器窯跡は，県内は勿論，大きく学界において注目されるにいたった。その要因は，矢張り須恵器窯跡の北限ということであり，学問的意義は大なるものがある。

市教育委員会においては，その重要性に鑑み，発見直後，慶応大学の江坂輝彌講師。弘前大学の村越　潔講師そして北奥古代文化研究会の平山久夫氏。津軽考古学会の秋元省三氏などに現地視察を願い，須恵器の登窯であることを確認するにいたった。

そこで，古代窯跡研究家である立正大学の坂詰秀一講師を主査とし，前記４氏を加えて調査団を組織して発掘調査を施行する計画をたて，東京においての連絡は平山氏に嘱してその実現方の促進を願ったのである。

１９６８年５月２日より１０日迄の９日間，立正大学及び弘前大学の考古学専攻学生，市内及び近接市町の高校生の協力を得て発掘を実施し，当初予期した通りの成果を挙げることが出来た。

よって，とりあえず発掘調査の概要を公けにし，近く出版する予定の報告書の刊行迄，しばらくその成果の概報としてここにプリントに付することにした。

Ⅱ 鞠ノ沢窯跡の概要

鞠ノ沢窯跡は，東南面する傾斜面に構築され，主軸をＮ－４０度－ｗに有する半地下式無段登窯構造のものである。全長９.２５ｍ，中央の焼成部巾２.１５ｍ，焚口部巾２.２５ｍを有している。ただ，煙出し部の一部がすでに破壊されており原形は若干全長にプラスして考えなくてはならない。焼成部と燃焼部の境界は，明瞭に識別され，後者は前者より０.２ｍ堀りくぼめられている。窯底勾配は，焼成部中央にて２３度を算する。

窯の構築は，往時の地表面より平均０.４ｍ堀り下げ，窯底と窯壁をそこに設け

天井は，地表上に露出していたものであり，煙出し部の煙道は，地表面近くに位置していたようである。

窯の構築は，底面は砂を敷きつめ一部粘土を張ったものであるが，窯壁と天井部は，スサ入りの粘土をもって築造し，壁面にて厚さ0.5m，天井部にて平均0.4mの厚さを有する。

壁面の状態は，焼成部及び天井部は，かなりの火度を受け青色に変化しているが，煙出し部周辺及び燃焼部は赤色を呈している。

燃焼部には多量の木炭を遺存していたが，木目の通らぬ粉末状のもの多く燃焼の状態が良好であったことを察せさせる。

出土遺物は，須恵器破片のみであって総量リンゴ箱約1個分である。

須恵器は，長頸壺・甕・坏の3種が認められ，壺と坏はロクロ使用の痕跡が顕著である。また，甕は，外面にタタキ目が残われ，概して大形品の傾向が支配的である。坏の底部は，篦起しと糸切りと2種あり，ともに形態は軌を一にする。

Ⅲ　砂田窯跡の概要

砂田窯跡は，鞠ノ沢同様，東南面する丘陵斜面の中腹に位置し，主軸は，磁北より西に偏している。林道工事中，焚口部が破壊されているので完全ではないが窯底勾配30度の半地下式無段登窯の構造を有する現存長5mのものである。燃焼部巾は1.8m，焼成部巾は，最大の部分にて1.5mを算する。窯の底面は，当時の地表面より0.3～0.8m堀り下げたところに設けられ，スサ入り粘土をもって壁面を構築している。天井部はすべて窯中に落下して旧態をとどめていないが，燃焼部付近においては，壁が若干アーチ形をえがいて残存していた。

出土せる須恵器は，大形の甕・壺の類が多く，それに若干ではあるが坏を伴っていた。特徴は，鞠ノ沢出土品と軌を一にしている。ただ，鞠ノ沢に比して，砂田の方が赤色の須恵器が多く認められたことは，砂田窯の方が操業期間中に若干のミスを犯していたことを示しているとも考えられる。

Ⅳ　調査結果の収束

鞠ノ沢及び砂田の須恵器窯跡の概要は，以上のごとくであるが，それより明らかにされた事柄について概括しておく。

① 窯の構造は，半地下式無段登窯の範疇に入るものであるが，東北地方全域に認められている一般的な須恵器窯と比較して，簡略化の傾向が窺われる。このことは，本窯の築造時期が，かなり下降することを示している。

② 出土した須恵器は，壺。甕形の場合，東北裏日本の中世墳墓及び中世経塚出土のものに　近似例があり，中世の窯跡なることを示している。

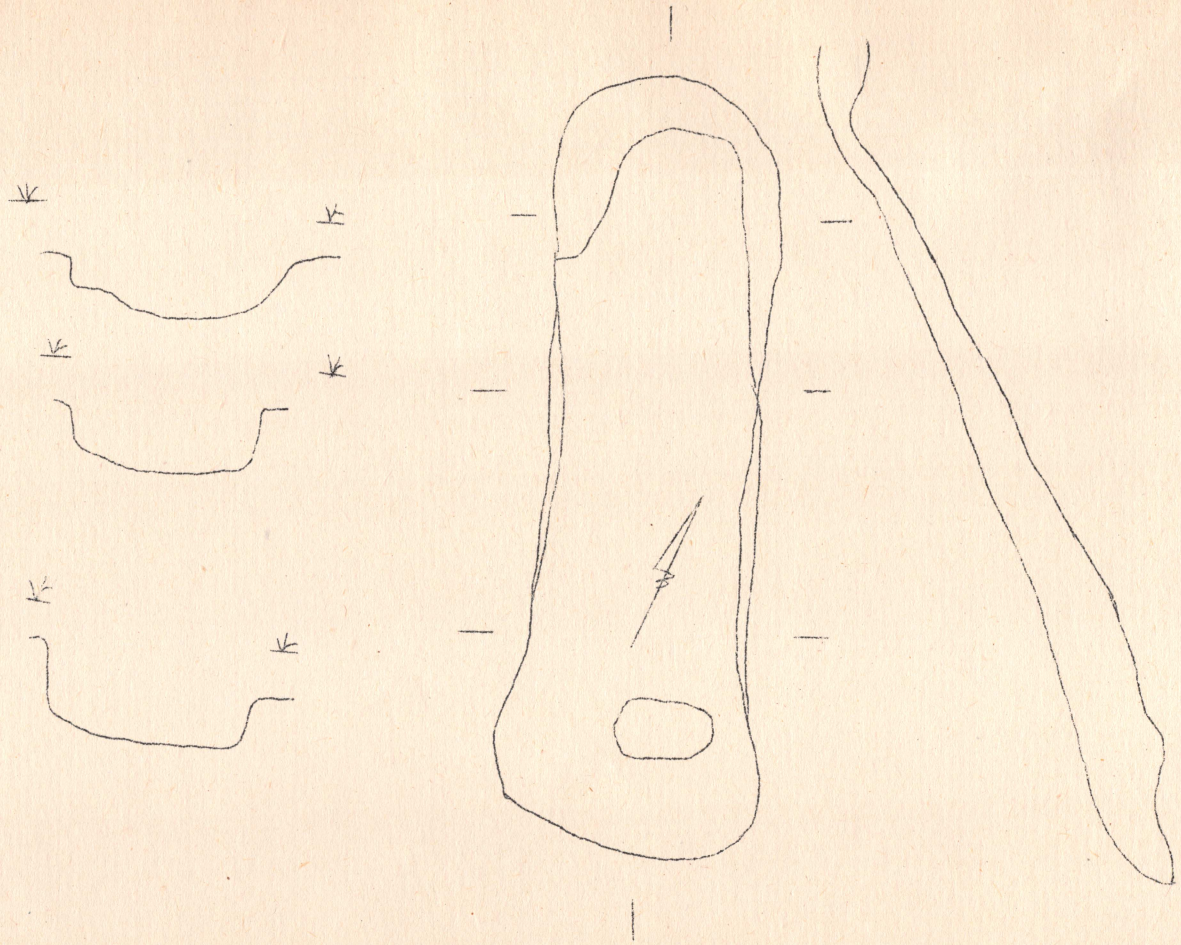
③ 坏の底部には，篦起しと糸切りの2種の手法が混在して見出されたことは東北北部における須恵器の編年的研究を試みる場合注意さるべき実例を呈示した　というべきである。

④ 須恵器の大形壺の場合，赤褐色に近い色調を有すものが混じており，所謂常滑質のものに酷似する。このことは本窯が中世の所産であることを示す一斑として把握されよう。

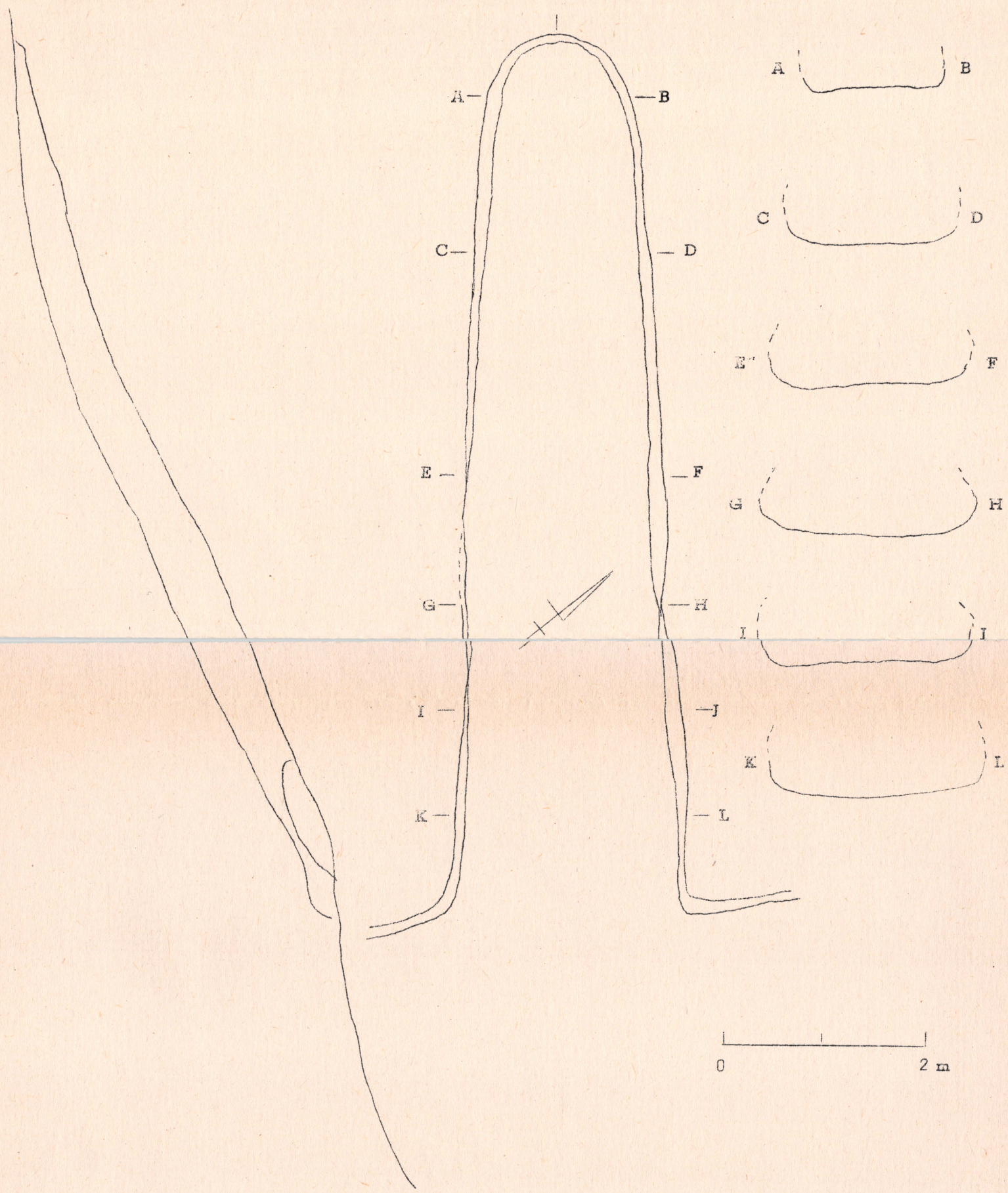
⑤ 鞠ノ沢並びに砂田の窯跡は，以上の諸点などより推考して中世～鎌倉時代に中心をおいて考えることが出来るのであり，ことによるとそれより若干下降する時期にまで入ることになるやも知れぬ。

⑥ 前田野目地域には，今回調査した以外にも谷に面する斜面より須恵器片の出土が知られているので，今後における調査によって，より多くの窯跡の存在が発見されることになるであろう。

（文責。坂詰）



砂田窯跡実測図



鞠ノ沢窯跡実測図